

Uターン就農・・・我が家の場合 (その4)

「胃袋でつながる絆」

畑作農家(十勝・清水町)

森田 里絵

◆「週休二日」から「年休三ヶ月」へ

北海道の畑作農家は、十二月から翌年の二月末まで、実質的に三ヶ月の休みがある。「いいなあ」と羨ましく思う人もいるかもしれない。しかし、多くのサラリーマンの「週休二日」制度では、一年間トータルするのだいたい一〇〇日の休暇がある。これを月になおすと約三ヶ月と半月。結局農家はこの休みを冬にまとめてとっているだけと考えると、えればわかりやすい。

サラリーマンの頃だって、休暇をきっちり休めていたわけではない。休日出勤もあつたし、家に持ち帰って書類作成に追われたことだってあつた。

農家になつても、冬の間は決算の書類をつくったり来年の営

農計画を立てたり、地域のさまざまな集まりなどかなり忙しい。

サラリーマンのように週休二日でメリハリをつけるのと、農家のように休暇をまとめてとるのではどちらがいいのだろうか。どっちにしる、休暇の間に心と体のストレスをしっかりと休めておかなければならないのは、確かだ。

◆「私がやらなきゃ誰がやるのさ!」

地元の農家の奥さんたちとは、春から秋にかけては畑仕事で忙しく、顔を合わせる機会はある。元々の忘年会や若妻の集まりなどで出会う機会が増えてくる。情報交換の場はなかなか貴重だ。今日はこつちの会、明日はあつちの会、とけっこう忙しい。

森田 里縦 もりたりえ)さん



清水町 農業
1968年 長崎県生まれ
京都大学農学部卒
1990年 北海道庁入庁
胆振支庁、道農政部、環境生活部
などを経験
2001年 哲也氏と 職場結婚
2004年 退職し、清水町でUターン就農

現在、経営面積33畝

栽培作物：小麦、ビート、小豆、大豆、手亡、
ジャガイモなど

奥さんたち……といつても、
ふつうのサラリーマンのマダム
たちの集まりのイメージとはか
なり違う。みなさんそれぞれが
経営の一部を担っていて、「私
がやらなきゃ誰がやるのさ！」
という仕事はたつぷりある。だ
から、しつかり自立していてプ
ロ意識が高くプライドが高い。
だから、どちらかといえば道庁
で働く女性職員たちに通じると
ころが多く、そのせいもあって、
最初はかなり緊張していたが、
思っていたよりも早くなじんで
しまった。

農家の女性たちの仕事にはキ
リがない。春から秋にかけては、
日の出前には起きて昼の分まで
ごはんを作り、掃除洗濯もすま
せてしまう。太陽が顔を出す頃
にはもう畑に出て暗くなるまで
仕事をし、暗くなったら自家菜

園の手入れをして食べる分を確
保。家に戻って夕飯の支度をし
てご飯を食べて洗濯物をたたむ
頃にはもう夜の九時頃。手を動
かすのを止めた瞬間に眠くなっ
て寝てしまう。さらに、搾乳し
ながら子育てをしていて、介護
もしながらペットの犬猫の世話
もして庭回りもキレイに手入れ
している人たちもたくさんいる。
ほんとうにいつ寝ているのか、
という感じだ。そのうえ少しで
も時間が空いたら漬物を漬けた
り、お菓子をつくったり、縫い
物をしたりと、とにかくじつと
していないからスゴイ。

「近頃は農家の嫁さんも楽に
なった！」と良く言われるが、
これで楽になったというのだか
ら今まではいつたいたどうだつた
のだろうと恐ろしくもなる。し
かしここで暮らす奥さんたちは、

やつれ果てたというイメージよ
り、バイタリティいっぱいめで美
しい方ばかりだ。「私がやらな
きや誰がやるのさ!」といいな
がら、元気に大笑いしている。
きつと、そういう女性たちだか
らこそ、今こうやって生き残つ
てきているのだろう。人間は、
自分がいなければだめなんだと
いう気持ちがあれば、かなりの
忙しさを乗り越えられるんだと
驚かされる。

また、どこの農家も夫婦仲良
しのところが多い。女性たちが
集まれば、「ハウスのビニール
を替えるときに、大ゲンカし
ちゃったわよ!」「ほんと男の
人って勝手よね!トラクター
乗ってるだけではわからないの
よ!こつちの仕事やってみれば
いいのに。」と、「夫婦ゲンカ自
慢」が始まるのだが、結局のと

ころは「仲良し自慢」?かなと
思うことが多い。ケンカするほ
ど仲が良い、というのかいつも
お互いに隠し事をせずと言
合っているから、だんだん
と気心がしれてくるのだら
う。どこもまるで漫才のよ
うな「名(迷?)コンビ」
の夫婦ばかりだ。畑仕事
には、男の人が得意とする
仕事もあれ
ば女性が得
意な仕事も
あるし、必
ず二人が呼
吸をあわせ
なければな
らない仕事
もある。お互いの存在がいかに
必要かということがよくわかっ
ているから、いくらケンカして
も支え合える。「熟年離婚」と



おはぎ

和えのおからのにんじん

◆「胃袋」でつながる絆

というのはこのあたりでは聞いた
ことがない。

農村で
夫婦が仲
良しの理
由には、

「胃袋に
よる絆」
のせいも
ある。サ
ラリーマ
ンの頃は、

「夫と一緒にご飯をたべ
るのは週末だけ」という
ご夫婦も結構いたが、農
家はほとんど朝昼晩、イ

ヤでも同じ食卓に向かう。この
結びつきは、言葉ではうまくい
いあらわせないほどの強さがあ
る。

冬は、ゆつくり食べ物と向き
合える季節でもある。昔は乾燥
させたとうもろこしや豆などを
いつもストープで煮ていたとい
うが、今はそうではなくなつた。
それでも美味しいものはたくさ
んある。

ただ輪切りにした大根を、
ちよつと多めの油を敷いたフラ
イパンに並べ、ふたをして途中
で酒を加えながらじっくりと焼
く。大根がホクホクになつたと
ころで、しょうゆをかけていた
だく。即席の大根ステーキだ。

じゃがいもは洗って、オリ
ブオイルをかけてオーブンで三
十分。いい香りがしたら、塩を
かけていただく。白菜はぎつく
り四分の一に切つて、葉の間を
洗つてそのまま蒸す。蒸しあ
がつたらポン酢や酢味噌などを
つけて食べると甘さがたまらな

い。こんなシンプルな料理が、とても美味しい。

「大根は米のとき汁で煮てから使う」「じゃがいもは皮をむいて最低三十分は水にさらすと」……。市販の料理本のレシピは、昭和の頃に食材の流通が未発達で良質のものが届かなかつた時代の調理法を基本としているために、けっこう複雑だ。

料理嫌いの女性が増えているのもこのせいかと思う。食材さえ良ければ、料理というのはそんなに手を加えなくてもじゅうぶ



かぼちゃ

ん美味しいものだ。こんなシンプル料理でも、いつも一緒に食卓を囲んでいれば、どんな夫婦でもラブラブ間違いなし!?

◆農業を「消えゆく産業」にしたくない

生乳の生産調整、畑作・稲作の品目横断制度にオーストラリアなどとのEPA・FTA。このところの国の政策や政治家たちの発言、マスコミ報道などをみていると、農業そのものを「税金のムダづかい」「消えゆく産業」と扱っているような印象を受けてしまう。まあ、全国の農業産出額は九兆円弱、北海道は一兆円前後だ。一方で日本を代表するトヨタ自動車は、一企業だけで総売上げが二一兆円、純利益だけで一兆円を越す。産業構造などを単純比較はできな

いが、納税額などから考えれば農家よりも大企業を優遇したくなるのは当たり前ともいえる。

「離農者が増えることは規模拡大のチャンス」という人もいるが、離農者が増えるほど、農業全体の発言力はその分落ちていくように思える。

でも、そのままでもいいのだろうか。「食べる」ことへのイメージを一般の人に聞いてみると、「喜び」「生きがい」「楽しさ」「生きる基本」「命」「健康」などという答えが返ってくる。人間は、食べないと生きていけないのだ。そして誰もが安心な食材を求めている。デパートの地下を歩いてみると、高級

な食材に惜しげもなくお金を払っている人たちがいる。食べる側はそれなりの「価値」をみたすものであればお金を払うもの

なのだ。これらの「価値」を消費者と上手に共有することが、

北海道の農業はまだまだ苦手なようだ。この三年間経験してみても、北海道の農家の素晴らしい技術力と地道な努力は、あまりにも世の中に知られていないと感じる。この「技術力」と「美味しさ」の価値をきちんとPRして、消費者の「胃袋」を味方にする努力を重ねていけば、そう簡単に国際競争力に屈することはないと思っ

ている。冬のこの季節、ゴロゴロしてはいられない。一人でも多くの人に北海道の農家の努力や工夫、美味しい食材のこと、シンプル料理法などを伝えたいと思う。そんなふう

に欲張っていると、あつという間に「年休三ヶ月」は過ぎていく。

そして、春がまたやってくる。